

■（５９）「ペンは剣よりも強し」とは言っても…

オウム真理教の一連の凶悪事件の裁判が終わった。教団は国家転覆を狙って銃で武装し、化学兵器「サリン」まで製造していた。当時の担当検察幹部が「戦争だった」と振り返っていた。担当した記者の１人として同感だ。あれほどの大事件はその後も起きていない。

「戦い」の先頭に立ったのは警視庁。その巨大な捜査機関に、各新聞社は普段から、１０人前後の記者を常駐させている。殺人や強盗を担当する１課担当、汚職や経済事件を担当する２課担当、薬物犯罪などをてがける生活安全担当。過激派やスパイ事件を担当する公安担当…。普段は別々のテーマを追いかけるが、その時は違った。担当記者が増員されたうえ、全員が数カ月、オウム事件だけ取材する異例の態勢だった。

次々と事件を起こす教団はまさに恐怖だった。記者として「ペンが剣よりも強し」と使命感に燃えていても、家族が巻き込まれてはかなわない。自宅の表札を外した仲間もいた。

盛岡総局に１枚の写真がある。朝日新聞阪神支局襲撃事件で命を奪われた記者だ。そこが記者生活を始めた場所だった。その遺影を見てまた、ペンを握る覚悟を新たに（山）